

“高度情報化社会における教育課題を考察する：教育の原点・理念に焦点を当て”

大学院教育の現況：総合研究大学院大学の特殊事例を踏まえて

総合研究大学院大学

高畑 尚之

総研大

- 大学共同利用機関を基盤（研究現場の教育と広い視野の養成）
- 運営費交付金対象事業費（約20億円／年）
- 対学生教員比＝2
- 学位コスト＝2000万円

- 話題
- フンボルト（Wilhelm von Humboldt）理念
- 広い視野、社会貢献
- 教育の役割と機能の見直し

Humboldt's concept

- 知識は進歩する、たえず明らかにすべきもの
- 教師だけでなく学生も研究
- 大学が教えるもの = 新しい知識を発見、進歩させる技法

- 批判
- 理想主義的学生観 (Burton R. Clark)

フンボルト型大学

- 少数エリート主義 (文系ゼミナール、理系実験室)
- 一般学生 = 無視、特権的自由を謳歌、目標設定の困難さ

この二重構造は19世紀後半には破綻
例: 京大法学部、Peter F. Drucker

フンボルト批判(例:Sylvia Paletschek の神話)の吟味

- 潮木守一
- 研究 = 新しい知識の発見。大学は学生が研究活動を実践できるように訓練する責務
- 研究を通じての教育 = 現場密着型の重要性。しかし、大学とは1つの専門に没入する場であるとともに、異なる領域の人々が出会う場でもある。
- 大学は、構成員の「こころの旅」を可能とする場
- これからの大学:「だれでも、いつでも、どこでも、なにでも」学習できる場

広い視野と社会貢献

- 知の基礎体力(鷺田清一)
専門分野の研究を深めるほど視野を広げる必要
- 文理融合(納谷廣美)
時代は両者の融合を必要としている
- 知情意(知力、情の力、勇氣)(安西祐一郎)
- 幅広い専門知識の学びが必要(小林誠)
- 多様な専門知識を理解する能力(Drucker)

それぞれの専門知識に精通する必要はないが、それが「何についてのものか」「何をしようとするものか」「中心的な関心事な何か」「中心的な理論は何か」「どのような新しい洞察をあたえてくれるか」「それについて知られていないことは何か」「問題や課題は何か」を知る必要

Innovation (創造的破壊, 新結合) Joseph Alois Schumpeter

- 科学的、技術的、社会的 Innovation
文系・理系の知識全体から生まれ、発展
- Charles P. Snow [The Two Cultures] : 文系と理系間のコミュニケーション不在
- Peter Drucker : 二文化間の亀裂の修復
 - 自然科学者には人文科学者たることを(自然科学を有効なものとし、真に科学的たるための知識や知覚をうるために)
 - 人文科学者には自然科学を理解することを(せつかくの人文科学を無意味で役に立たないもの にしないために)
- 大学の3機能
 - 教育(学際的な応用分野とともに狭い範囲の専門分野を教授する必要。理由は、専門家の仕事 に敬意を持ち、一つの専門分野では何もなし得ないことを教授する必要があるから。)
 - 研究
 - 社会貢献(知識を行動に移し、社会に成果をもたらす機能)

教育の役割と機能の見直し

- Johannes Amos Comenius (チェコのプロテスタント) = 近代教育の父、教科書の発明。聖書を独力で読む
 - 「L'Encyclopedie」 = 18世紀後半、産業革命の基盤。Techné(秘伝としての技能)を体系化、公開
- ICTの普及 = 学生はパソコンを道具に自ら学び、
教師は動機付けし、指示し、激励する

大学の課題 = 知識の生産性をあげるための方法論について教える

- 知識社会の大学
 1. 高度な基礎教育(最優先)
 2. 学習意欲、継続学習の習慣
 3. 年齢によらない機会の提供
 4. 他機関との競争とコラボレーション
- 大学は責任を負うべき成果を明らかにする。
- 教養ある人間(注:ヘッセ「ガラス玉演戯」) = 広い視野、他の文化や伝統を理解する能力、自らの知識を役立たせる能力